

つながりの中でくらす
望まれた人として生きる
自分らしく生きていく



No. 65

2020年8月発行

相談支援ほうぷ スタート！

6月に特定相談支援事業と障がい児相談支援事業を開始しました。当法人は、設立以来、障害児者を対象に、制度上のサービスではない相談援助の活動を行ってきました。放課後等デイサービス開始以降も、「こども相談ほうぷ」の活動を行っています。社会福祉士が役員のNPO法人ですから、ソーシャルワークは最も大切な活動の一つだと考えています。

しかしながら、制度としての相談支援事業は、計画案や計画、モニタリング報告書を作って収入を得る制度になっており、丁寧に相談援助や環境調整を行っても、それが必ずしも収入に結びつくものとなっていないため、福祉サービスを組み合わせて書類作成することが仕事ようになってしまう事業なのではと感じ、なかなか事業開始の決断ができないでいました。参画している旭区地域自立支援協議会でも、相談支援事業者が少ないことが課題に挙がっていましたので、法人の使命としていつかはやらなければいけないかなあと思いながら、一步を踏み出すのに2年もかかってしまいました。

相談支援事業を始めるまで時間がかかりましたが、ソーシャルワーカーとして、丁寧に相談援助と環境調整を行っていきたいと思っています。これまで、子どもにかかわる活動を中心に行ってきた当法人ですから、障がい児相談支援を中心に事業を行っていきたいと思っています。単に福祉サービスを組み合わせて子どもの生活を作るのではなく、子どもと家族の生活を中心として、子どもの最善の利益を大切に、保護者が楽しみながら、将来の希望を思い描きながら生活できるように、家族に寄り添っていきたいと思います。守秘義務がありますから、会報で事業内容の詳細を報告することはできませんが、応援をよろしくお願いします。

(地域生活サポートネットほうぷ 向井裕子)

お知らせ



パソコンのアドレスと、HPのアドレスが変わりました。

よろしくお願いします。

メールアドレス houpu@r.river.sannet.ne.jp

ホームページ <http://supportnet-houpu.com/>

2019年度事業報告

2019年度は、児童福祉法に基づく障害児通所支援事業（放課後等デイサービス）、障害児者の自立に向けた支援事業、子育て支援事業、生涯学習講座等の企画・運営支援事業、まちづくりの推進に関する企画及び研究事業を実施した。また、法人の設立15周年フォーラムを近隣の小学校の講堂で開催した。地域住民や関係機関と連携しながら地域に密着した活動を展開することができた。

（1）児童福祉法に基づく障害児通所支援事業（放課後等デイサービス）

利用者の満足度調査を実施して公開し、運営の改善や支援内容の検討・改善を行うことができた。エルムおおさかの訪問指導、子どもの権利についての研修、救命研修などを実施したり、職員ミーティングやアルバイト職員の振り返りを日々行ったりして、支援内容の充実と職員の質の向上を図った。当法人独自の「ワタシ×ミライ ワークショップ（こどもからはじめる個人将来計画）」「こどもILP（自立生活プログラムこども版）」「自分研究」「こども会議」などに取り組んで、支援者が子どもの思いを受けとめることや、子どもたちの生活体験を広げ、子どもの主体性を育むことを考えた支援を行うことができた。

特に「こどもILP」に関しては、地域住民や学生ボランティアの協力を得て、季節の行事、お出かけや、「カフェほうふ」「クリスマス会」などを行うことで、子どもの体験やつながりを広げると同時に、子どもたちが「やってみたい」、大学生の「真似をしてみたい」などの意欲を喚起して、主体性を育み、将来を思い描く機会をつくることができた。「働」をテーマにしたプログラムでは、区内公共施設や高齢者施設、地域のふれあい喫茶などの協力を得て「しごと体験」を実施することができた。「衣」をテーマにしたプログラムでは、近隣の専修学校の先生方にご協力いただき、Tシャツを染めてオリジナルシャツを作る体験ができた。

地域資源との連携により、当法人の活動への理解を深めることもできた。ボランティアの交流会も開催し、ボランティア活動の活性化を図った。また、旭区社会福祉協議会のイベントに参加してゲームコーナーを出店し、地域の方々と交流をはかることができた。地域との連携が深まるとともに、地域や学生に対する啓発活動にもなった。

避難訓練や救命講習会を行ったり、災害についてのこども会議やクッキングを行ったりして、防災の取り組みを行い、緊急時に備えることができた。

（2）障害児者の自立に向けた支援事業

8月に浴衣を着て夜店に行くイベントを実施した。昨年同様に旭区老人クラブ連合会のご協力により、子どもたちも学生ボランティアも貴重な体験をすることができた。9月には障害をもつ子どもたちがボランティアのサポートにより1泊の宿泊体験を行った。子どもたちにとって貴重な体験の機会を提供することができ、自立に向けた取り組みとなった。

旭区地域自立支援協議会に参加し、旭区地域福祉計画案の作成に向けて意見交換を行い、今後の地域福祉の向上に協力した。同協議会こども部会では、昨年度に続き、就学進学相談会と保護者向けセミナーを行い、障害児の家族の悩みを共有したり、将来に向けた情報を提供したりして、保護者への支援を行うことができた。また、事業所連絡会(児童)に参画し、事業所対抗ポッチャ大会では、区内障害児通所支援事業所との関係を深めることができた。

（3）子育て支援事業

6月に法人の設立15周年フォーラム『つながりの中で暮らす 自分らしく生きていく～子

どもの居場所づくりに向けて～』を近隣の小学校の講堂にて開催した。町内の小学校、保育所・幼稚園、民生委員・主任児童委員等で構成する「清水地域子育てボランティアグループ」の協力により開催することができた。広くチラシを配付して参加を呼びかけ、地域住民と共に考える機会を作った。子どもの居場所をテーマに、講演会とグループディスカッションを行い、これまでの活動を振り返り、今後の活動の可能性を広げる内容とした。

旭区役所が事務局を務める「旭区子育て安心ネットワーク」の定例会や、旭区社会福祉協議会が事務局を務める「あさひの輪」の定例会への参加、旭区内の子育て支援イベント「子育てわいわい広場 in ASAHI」の開催協力などを通じて、区内の子育て支援の充実に向けて取り組んだ。また、「清水地域子育てボランティアグループ」の定例会にも参画し、地域に密着した子育て支援に取り組むことができた。

「こども相談ほうぶ」では、成長が気になる子どもの保護者からの相談に応じ、子育てのサポートができた。また、「ブックスタート」を年4回開催し、乳児とその保護者が本と出会い、地域とつながる場を提供することができた。1月には「ほうぶ茶屋」を開催して、餅つきをし、地域の子育て中の家族の交流の場となった。

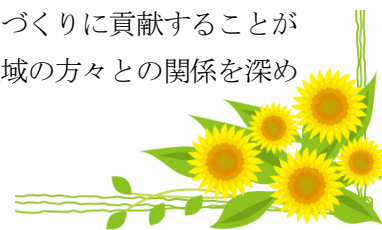
また、作業療法の視点からの発達障害の子どもへの理解と支援の研修会、自己肯定感や愛着課題に関する研修会を実施して、地域の保護者や支援者に対して研修の機会を提供した。

(4) 生涯学習講座等の企画・運営支援事業

社会福祉施設の新人職員むけ研修会や、大学生対象の特別支援教育、障害者福祉、福祉教育等の講義で、講師やゲストスピーカーを行い、障害児者の理解の啓発活動に取り組んだ。

(5) まちづくりの推進に関する企画及び研究事業

清水校下地域活動協議会で、定例会やイベント準備会への参加や、地域の異世代交流イベントの開催や子育てサロンクリスマス会への協力などを行い、まちづくりに貢献することができた。町会の清掃活動や餅つき大会など、地域活動に参画し、地域の方々との関係を深めることができた。



放課後等デイサービス「楽童ほうぶ」報告

6月に新しいスタッフが加わりました。そして、「相談支援ほうぶ」開始により職員の異動を行い、児童発達支援管理責任者が交代しました。通ってくる子どもたちについては、昨年今年と多くの高校生が卒業していき、小学生が少しずつ増えています。過渡期の「楽童ほうぶ」です。収益的には厳しい状況ですが、活動方針を確認しあい取り組んでいます。7月からは月一回のペースで、応用行動分析の職員研修を始めました。講師は、当法人の社員です。子どもとのかかわり方のスキルアップをしていきます。

昨年度末からの新型コロナウイルス感染症対策に必要な物資の不足についての心配は尽きませんでしたが、ご近所の方から手作りマスクをいただいたり、あちこちからゴム手袋や手拭き用ペーパータオルや消毒液をいただいたりしました。また、賛助会員の方からたくさんのカンパをいただきました。いろんな方々に助けをいただいて、本当に感謝しています。心

よりお礼を申し上げます。今後ともどうぞよろしく申し上げます。

前号会報64号発行の後から、新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言が発令され、さまざまな活動が自粛され、学校休業も長く続きました。「楽童ほうぷ」では、子どもさんが自宅で過ごすことのできる家庭にはなるべく利用を控えていただくようお願いし、大学生アルバイトに対しても生活に支障なければ休んでもらうようお願いしました。各家庭と相談をしながら、4月5月は、毎日5名程度（定員は10名）の子どもの受け入れをしてきました。医療や福祉のお仕事をされている保護者さんの場合、仕事が休めないもので、日によっては早朝からの受け入れをしました。5月末までは常勤スタッフ4名中3名は徒歩や自転車通勤でしたので、電車通勤の職員には自宅で事務作業をしてもらう日を作りながらも、毎日3人以上の職員体制で運営することができました。ただ、毎日、朝から夕方まで子どもを受け入れながら、朝や夕方に職員ミーティングを行い、いつもの掃除に加えて、不特定多数の人が使ったり触ったりしたものの消毒の徹底など、労力的にも精神的にも大変でした。子どもたちから元気をもらいながら頑張りました。

4月に予定していた遠足、5月に予定していた恒例の「カフェほうぷ」、大学生ボランティア交流会、全て中止にしました。地域交流や、しごと体験・クッキングなど「こどもILP」ができませんでした。子どもたちの生活リズムを整え、学習と遊びの保障をしっかりとして、今できることに努めました。楽童ほうぷは大きな一軒家で活動しているので、窓を開け放って換気を行い消毒を徹底し、プレイルームと台所を使って点在して学習をしたり昼食を取ったりしました。午前中は宿題や学習に取り組み、午後は公園に行って思い切り身体を動かして遊びました。毎日、体験を丁寧に積み重ねるようにしました。

7月には、高校一年生の「ワタシ×ミライ ワークショップ」を開催しました。また新型コロナウイルス感染症が広がってきたので、いつものように頭を突き合わせて模造紙に書き込んだりすることができないため、大きな半円になって、ホワイトボードに模造紙を貼り、参加者に書いてもらった付箋を貼り付けていきました。新しいワークショップの進め方を模索しました。3密を避けることを徹底していると、人と人との間の「感覚」や「空気」が抜け落ちてしまう感じがします。

遊

4月5月は、連日、公園遊びをしました。子どもたちが、ブランコに乗れるようになったり、ジャングルジムに登れるようになったりする姿を見て、子どもの成長ってすごいなと思いました。やっぱり、子どもの発達にとって遊びが一番の刺激になるのだと思いました。

5月下旬には、感染症拡大が少し治まってきたので、鶴見緑地公園に遠足に行きました。混雑しているであろう庭園周辺は避け、広い芝生や林あたりで遊びました。暑い日で、熱中症が心配されました。マスクの危険性を強く感じました。濡れタオルで首や頭を拭いて体温を下げるようにし、水分補給の時間を度々とりました。子どもたちは元気に走りまわって本当に楽しそうでした。6月も遠足を予定しましたが、あいにくの雨で中止になりました。そこで、2チームに分かれてチーム対抗のゲーム大会をしました。複雑なルールを理解することが難しい子どももいますので、みんなが参加できるようにわかりやすいゲームにしました。身体も使い距離も取りながら行える3つのゲームを行いました。

大学生がボランティア活動できない状態なので、音楽活動を担当してくれている学生さんも来ることができず、スタッフだけで行いました。6月は、ヨーグルトの空き容器にいろんなものを入れてマラカスを作りました。表面に絵を描いたり色を塗ったりしました。できあがったマラカスをアニメの主題歌に合わせてシェイクしながら踊って楽しみました。



学

今年度から、グループワークの活動を開始しました。最初に、リラックス呼吸法で心身をほぐして、その後、トーキングサークルを行っています。はじめは緊張や抵抗感を示す子どももいましたが、回を重ねるなかで、進行の流れや雰囲気にも慣れてきたのか、子どもたちの間にもプログラムとして定着しつつあります。絵カードを用いることで、発話が難しい子どもも意見表明できるよう工夫しています。7月は、「夏祭りといえば何が楽しみ?」というテーマで、一人ひとりの思いを受けとめ合いました。子どもたちが自他を尊重するコミュニケーションを体験的に学んでいくことができればと思います。

長雨の梅雨時期、創作活動をたくさんしました。アジサイのちぎり絵では、子どもたちは、思い思いの色紙をちぎり、あらかじめ葉と茎を描いておいた模造紙に貼り付けていきました。カラフルなアジサイの花畑になりました。革のキーホルダー作りもしました。金属製の型を革に押し付けて木づちで叩き、イニシャルや模様をつけました。これまでは、しごと体験の販売用に準備していた革キーホルダーですが、子どもたちが自分用や家族へのプレゼント用にオリジナルのキーホルダーを作りました。7月には七夕の短冊や飾りを作りました。好きな色の短冊にやりたいことやほしいものを書いて、笹につけました。色紙を折ってはさみで切るだけの簡単な飾りも作りました。

7月は再びの感染症拡大で、防災センターへの遠足を中止し、防災に関わるクイズ大会と担架作りをして、防災の取組みをしました。



食

緊急事態宣言が解けて、6月下旬からお菓子作りを再開し、7月からクッキングを再開しました。久々のお菓子作り第一弾は、レシピ本を見て、フライパンで作る焼きスイートポテトを作ることになりました。焦げてしまいましたが、サツマイモの自然な甘さがおしかったです。



アジサイのちぎり絵

寄稿 はじめての一日ほうぶ体験

私は先日初めてほうぶを訪問しました。大学の授業のフィールドワークとしてご協力いただいたのですが、今回はその時の私の体験と感想を書きたいと思います。

訪問したのは金曜日の午後、湿気が多い曇りや雨の日でした。15時半頃、皆が集まった広間は、かなりワイワイしており、各々好きなことをしていました。宿題をする子、ゲームをする子、ホワイトボードにふざけて何か書きながらスタッフさんにツッコミを入れられている子……。それから夕方の約2時間半、子どもたちの活動を眺めたり、付き添ったり、一緒に遊んだりして過ごしました。

Hちゃんはいよいよお表を持って指差しで話していました。慣れているのか、指すのがとても速く、目で追うのが初めは大変でした。スタッフさんが、彼女が指す文字を声に出して、その単語を紙に書き、「それさっきも言ったやん」とツッコミを入れたりしながら返答をしていました。紙を見ると脈略のなさそうな単語がずらり並んでいたのですが、彼女を見ていると、断片的に、これがこうだ、これがしたい、というような意思が不思議ともものすごく伝わってくるような感じがしました。「名前は何？」と聞くと指差しで答えてくれました。

元素記号の宿題は家でやるのだと主張するKくんは、「ここでやればいいやん」と言うスタッフさんに反論しながらも、なんだかんだ表に記号を書き込んでいました。私は横で見守りながら、探り探り何か話しかけましたが返答が来ることはあまりなく……。しかしたまに目が合い、彼が私の方を気にしたり探っている感じが見て取れました。

Mちゃんは時々不意に私に「バンバン！」と指鉄砲を打ってきました。私はほぼ無意識で反射的に「うっ！」と撃たれたふりをしてしまうのですが、逆に私が撃ち返すと、テンション低めに腕をバツェンにしてバリアされてしまいました。慣れない私は反射的にバリアを発動させることができず、一日中弾を受け続けました。

Tくんは一人で静かにキッチンのテーブルで折り紙をしていました。目の前には完成したらしい折り紙が一つと、iPadが置いてあり、YouTube「シャツの作り方」の動画が途中で止まっていた。なんと話しかけようか迷った挙句、「これ見ていい？」と折り紙を指すと、「うん」とうなずいてくれました。すると彼は再びyoutubeを再生し始め、彼は近くにあった紙で折り始めました。「紙、小さくない？(笑)」と言いましたが、彼は器用

に折っていました。

子どもたちを眺めた印象として、どの子がどのような障害を持っているか、明確には分からず、本当に障害があるのか？と疑うような子もいました。子どもたちの気ままな元気さを見ていると、なにが障害で、なにが健常なのかなんて本当に分からないのではないかと考えたりもしました。正直ここに来る前、私は少し緊張していたのですが、それは余計な心配だったと思うほど、そこに入った途端、子どもたちの元気なパワーに巻き込まれる心地よさがありました。

また、私自身もただそこにいることが許されているような感覚がありました。一人の人間として、自分自身のままでそこに居る事。それが認められるのがこの場所であり、子どもはもちろんですが、大人側もそうなのかもしれないと感じました。もちろんスタッフとしては安全面など気を引き締めて配慮しなければならない面もたくさんあるとは思いますが、大人も一個人として楽しんでいる印象を受けました。

何より、子どもとのやりとりを通して考えたのは、言葉ではないコミュニケーションの偉大さでした。身をもって感じましたが、こちらが何か話しかけても予想通りの返答が来ることなんてほぼありません。それぞれの言語があって、それぞれの表現があって、伝わることも伝わらないこともある。だからこそ、相手をちゃんと見て、ただ傍に居ること、ちょっと近づいてみること、目を合わせること、触れること。普段頼りがちな言葉の力からちょっと離れて、そんなコミュニケーションの力を信じてみる、そんな体験だったなと感じています。

スタッフさんが小学校の校門で子どもを待つ間、こんな話をしてくれました。放課後、車で放デイに行くか、徒歩で家に帰るか、そこで子どもたちの帰り道が二分されてしまうが、それは基本的に親が決める。子どもと大人の要望にはよくズレがあるものだ、と。この日会った子どもたちがどのような理由や経緯でほうびに来たのかは私は知りません。でも、ここでの出会いや、過ごす時間が、一人一人にとって人生の財産として残るものであってほしいなと、一日過ごしてみて思いました。

大阪大学大学 言語文化研究科 言語文化専攻 修士2年 村瀬萌



● 地域活動報告 ●

新型コロナウイルス感染症拡大の緊急事態宣言のため、4月5月の地域活動が中止になりました。

旭区地域自立支援協議会こども部会では、小学校と相談支援部会のご協力により、6月から、旭区内10小学校と旭区役所において、「就学進学なんでも相談会」を開催しました。40人以上の相談者が来られました。小学校への入学、中学校への進学、中学卒業後の進路についての相談などに対応しました。

- 6月 2日(火) 清水子育て支援ボランティアグループ定例会
- 6月 5日(金) 旭区子育て支援関係機関会議「あさひの輪」定例会
- 6月17日(水) 旭区地域自立支援協議会 相談部会定例会
- 7月 1日(水) 旭区地域自立支援協議会 こども部会定例会
- 7月 3日(金) 旭区地域自立支援協議会 仕事部会販売活動参加
(バザー開催・千林ふれあい広場にて)
- 7月 8日(水) 就学進学なんでも相談会参加 (大宮小学校にて)
- 7月10日(水) 就学進学なんでも相談会参加 (古市小学校にて)
- 7月13日(月) 就学進学なんでも相談会参加 (高殿南小学校にて)
- 7月14日(火) ブックスタート開催 (1組参加)
- 7月15日(水) 旭区地域自立支援協議会定例会
就学進学なんでも相談会参加 (新森小路小学校にて)
- 7月16日(木) 旭区地域自立支援協議会 事業所連絡会 (児童)
- 7月27日(月) 就学進学なんでも相談会参加 (清水小学校にて)
- 7月28日(火) 就学進学なんでも相談会参加 (城北小学校にて)
- 8月 4日(火) 就学進学なんでも相談会参加 (太子橋小学校にて)



先日、前川喜平氏の講演会「個人の尊厳から出発する教育論」とシンポジウムを聞きに行きました。娘がそのパネリストだったため、発表の様子を見てきました。最後に前川氏が、「自分らしく生きるとは、人(国や組織や世間)の言うことに惑わされなくて、自分の思うようにいくことだと思うが、Mさんはそのように生きていますね」と娘に言われ、一緒に参加した知人たちと笑ってしまいました。娘は、周りの空気は読んでその場にあった行動もできますが、確かに、前を向いて「ワタシはワタシ!」と生きています。それが自分らしく生きるってことか〜！酷暑が続きます。感染症拡大も止まりません。

みなさん、くれぐれも、お身体に気をつけてお過ごしください。

